豊富な体験（経験）・失敗が知恵を育む土壌となる

失敗を重ねたなかからしか、ノーベル賞は生まれない

旅をすることで得るものはたくさんありますが、なかでも得難い大切な経験が「失敗をする」こと。一般的には「失敗をしないよう」「間違えないよう」に生きている私たちですから、何を言い出すんだ？　と思われるかもしれませんが、失敗できることは非常に幸せなことです。

たとえば、子育て中のお母さんが、子どもが失敗しないように先回りして助けている様子を見ると、せっかくの失敗のチャンスを奪うようなことをしてもったいない、と思います。何かにつまずいて転べば、痛い。でも、その痛みを体感するから、次は気をつけようと思う。誤解を恐れずにいえば、失敗をすることでしか成長は望めません。

そういえば、２００２年にノーベル化学賞を受賞した島津製作所シニアフェローの田中耕一さんは受賞の記者会見で、たまたま間違えて液体を加えたことでノーベル賞につながる新発見ができたという趣旨の話をなさっていました。これ自体も「失敗から出たまこと」ですが、私は「田中さんは、この失敗にたどり着くまでに何十年もの間、何百回いや、それ以上の数えきれない失敗を繰り返したのだろう」と思いました。

１日24時間寝ているときにも、頭の中では研究のことを考えて考えて、失敗を重ね、考え抜いたその先にしかイノベーションはないのです。「これがノーベル賞なのだな」と思いました。田中さんは「たまたま」「偶然」に液体を入れ間違えたとおっしゃいましたが、決して偶然ではありません。

田中さんのレベルには到底届きませんが、私が経験した「カニ缶」のヒットも、自分では「たまたま」「偶然」を気取っていますが、実は、多くの失敗と試行錯誤の繰り返しのなかで、ヒットを掴んだという表現のほうが真実です。

ですから、私は「成功の秘訣があるとしたら？」と聞かれたらいつも、「成功する方法はひとつしかないよ。それは、たくさん失敗をすることだ」と答えています。

「いつもお元気ですが、落ち込むことはあるんですか？」と聞かれると、「失敗ばかり

で、落ち込んでいる間もないくらい大変やったから、落ち込んでいる時間はなかったよ」と伝えます。落ち込む暇があるのは、まだまだ大変さに余裕があるのです。失敗の数が足りていないのかもしれません。当然、社員にも「たくさん失敗しなさい」と繰り返しています。失敗して、失敗して、失敗して、いちばん多く失敗した人がいちばん多く学びを得る。失敗は人生の紛れもない糧といえるでしょう。

よくみんなに「君みたいにポジティブにはなれない」とも言われますが、私は、いや私も、最初は失敗するのが怖かったのです。なぜなら、失敗したら周りから叩かれて、蹴飛ばされて、干されて、精神的に追い詰められた状態に陥ります。でも、それでいいのです。失敗したときに中途半端な優しさは必要ありません。なぜか？　我々の勝負の場は、ビジネスだからです。ビジネスは結果がすべてなのです。叱責を素直に受け止めて、その悔しさをマグマに代えて前を向く。これも、失敗をしなければ経験しえない学習です。

マグマはご存じのとおり活火山の噴火等で地表に流れ出す地下の溶岩のことですが、私は実際にハワイのキラウエア火山でマグマを見たことがあります。以来、マグマの映像は私にとって忘れられないものとなりました。いくら水をかけても、いくら何かで覆い隠そうとしても、後から後から熱い塊はにじみ出てきて到底止められるものではありません。マグマは、消そうにも消せない、潰そうにも潰せない情熱やエネルギーのほとばしりのように思えました。何か事を成し遂げようとするならば、やはりマグマを内に秘めていなければならないでしょう。失敗は誰にでもあります。叩かれて、蹴飛ばされて、干されても、そうした時こそ、マグマを鍛え、熱くさせるチャンスだと考えられれば、怖いものなしです。

余計なことは考えずに飛ぶ（行動する）ことが大事

起業してからも多くの失敗をしてきましたが、旅と絡めていえば、モロッコのオイルサーディンを仕入れたときは、久しぶりに不安がよぎりました。それまでもヨーロッパやアメリカには展示会や仕入れの旅に出かけていましたが、当時、モロッコは私にとって未知の世界。風土も国民性もわからず、単純に「アラブは気が重い」というイメージを持っていました。

いつも「失敗してこい！」と社員たちを世界中に送り出す私ですが、お恥ずかしなが